いのちと生き方④　「ごんぎつね」を語る(2)

情景の一語にみる「生と死」「明と暗」「軽と重」

たった一語にも「いのちの言葉」がみられます。また、僅か数行にも、正と死の対比や同義が表れています。情景から色を拾い上げ、表にまとめていくと場面→色→イメージから「生と死」「明と暗」「軽と重」が鮮明になって、情景が一層味わい深くなります。

情景から色を拾い上げイメージ化した表

色を連想する場面	色	イメージ
あなの中	黒	暗い　さみしい
空はからっと晴れていて	真っ青	さわやか
雨のしずくが光って	透明	透き通る
黄色くにごった水	黄土色	重たい　揉まれる
ぼろぼろの黒い着物	黒	貧しい　着古している
ところどころ、白い物がきらきら光って	銀色	動き回る
赤いいど	赤	生きる
かまどで火をたいて	赤	騒がしい
ひがん花が、赤いきれのようにさき	赤	燃える　命　暑い
白い着物を着たそう列	白	冷たい　死　静か
ぴかぴか光るいわし	銀	活きのよい
月のいいばん	黒・黄	光・影
青いけむり～細く出ていました	青	消えそうな命

赤(生)と白(死)の対比

墓地には、ひがん花ばなが、赤い布きれのようにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘かねが鳴って来ました。葬式の出る合図あいずです。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちらちら見えはじめました。話声はなしごえも近くなりました。葬列は墓地へはいって来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがって見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌いはいをささげています。いつもは、赤いさつま芋いもみたいな元気のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。

対照

彼岸花が咲き続く　⇒　赤い列　⇒　生の帯　連続性

白い着物を着た葬列　⇒　白い列　⇒　死の帯

同義

踏み折られる彼岸花　⇒　赤い花　⇒　無情無念の死　　「踏み ＋ 折られる」

赤いさつま芋いもみたいな元気のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。⇒　しおれる顔

「ごんぎつね」を読むにつれ、その繊細さ奥深さに感動や驚嘆を覚える次第です！